

【 復活讃詞 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を
 神 爾 十 字 架 死
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ
 滅 盗 賊 た 爲 樂 園 開
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ
 攜 香 女 悲 慰
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か
 使 徒 爾 復 活 世 界
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳
 さ せ た ま え り 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世
 し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ち ゆ う
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖
 な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 聖三の歌 】

代禱) 主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
 主 敬 虔 者 救 及 我

らにききたまえ。
 等 聆 給

代禱) 世々に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世 に、アミン。

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等 を

あわれめよ。
 憐

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調 】

代禱 ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ}プロキメン、^{そのたみ}主は其民に^{ちから}力を賜い、^{たま}主は其民に^{しゅ}平安の^{へいあん}福を^{ふく}降さん、^{くだ}

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主

そ の た み に へ い あ ん の ふ く を く だ
其 民 平 安 福 降

さ ん。

誦經) ^{かみ}神の^{しよし}諸子よ、^{しゅ けん}主に^{こうえい}獻ぜよ、^{そんき}光榮と^{しゅ けん}尊貴とを主に^{けん}獻ぜよ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主

そ の た み に へ い あ ん の ふ く を く だ
其 民 平 安 福 降

さ ん。

誦經) ^{しゅ}主は^{そのたみ}其民に^{ちから}力を^{たま}賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ
主 其 民 平 安 福 降

だ さ ん。

【 使徒經 (アポストロス) 124 端 コリント前書 1 章 10 節~18 節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パウエルが^{ぜんしょ}コリント人^{よみ}に達する^{よみ}前書の^{よみ}讀、

代禱) ^{つつし}謹みて^き聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{われら}我等の^{しゅ}主^{な よ}イイスス・^{われなんぢら}ハリストスの^{もと}名^{なんぢらみない}に^{ところ}由りて、^{よみ}我爾等^{よみ}に^{よみ}求む、^{よみ}爾等^{よみ}皆^{よみ}言^{よみ}う^{よみ}所

^{おな}を^{かつなんぢら}同じくし、^{うち}且^{わかれ}爾等^{すなわちなんぢら}の中^{こころ}に^{いつ}分争^{おmoi}なく、^{いつ}乃^{あいあ}爾等^{よみ}心^{よみ}を^{よみ}一^{よみ}にし、^{よみ}意^{よみ}を^{よみ}一^{よみ}にして^{よみ}相^{よみ}合^{よみ}う

べし。蓋 我が兄弟よ、爾等に就きて、ハロヤの家人より、我に爾等の中に争のあ
 ることを告げられたり。我が言う所は、即爾等各言えるあり、我はパヴェルに屬す、
 我はアポロスに屬す、我はキファに屬す、我はハリストスに屬すと。豈ハリストスは分れ
 しか、豈パヴェルは爾等の爲に十字架に釘せられしか、抑爾等はパヴェルの名に藉り
 て洗を受けしか。神に感謝す、我はクリスプ及びガイの外、爾等の中誰にも洗を受け
 しことなし、人或は、我は我が名に藉りて授けたりと言わざらん爲なり。我亦ステファン
 の家に洗を授けたり、此の外何人に授けたりや否やを知らず。蓋ハリストスの我を遣
 ししは、洗を授けん爲に非ず、乃福音を傳えん爲なり、又言の智慧を用いしめず、
 ハリストスの十字架の虚しくならざらん爲なり。蓋十字架の言は、滅ぶる者の爲に
 は愚なり、我等救わるる者の爲には神の能なり。

(比較用 口語訳)

さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語る
 ことを一つにし、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っ
 てほしい。わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞か
 されている。はっきり言うと、あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」
 「わたしはケパに」「わたしはキリストに」と言い合っていることである。キリストは、いくつにも分
 けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あな
 たがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか。わたしは感謝しているが、クリスプとガイ
 オ以外には、あなたがたのうちのだれにも、バプテスマを授けたことがない。それはあなたがたがわ
 たしの名によってバプテスマを受けたのだと、だれにも言われることのないためである。もっとも、
 ステパナの家の者たちには、バプテスマを授けたことがある。しかし、そのほかには、だれにも授け
 た覚えがない。いったい、キリストがわたしをつかわされたのは、バプテスマを授けるためではなく、
 福音を宣べ伝えるためであり、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリ
 ストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。十字架の言は、滅び行く者には愚か
 であるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。

代禱) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第7調 】

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しじょうしゃ}至上者よ、^{しゅ}主を^{さんえい}讚榮し、^{なんぢ}爾の^な名に^{うた}歌うは^び美なる^{かな}哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。。

誦經) ^{なんぢ}爾の^{あわれみ}憐を^{あさ}朝に^の宣べ、^{なんぢ}爾の^{まこと}眞を^よ夜に^の宣ぶるは^び美なる^{かな}哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 58 端 14 章 14~22 節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) マトフェイ^{でん}傳の^{せいふくいんけい}聖福音經の^{よみ}讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

代禱) ^{つつし}謹みて^き聽くべし、

誦經) ^か彼の^{とき}時^いイス^{ぐんしゅう}ス出^みでて、^{これ}群衆^{あわれ}を見て、^{そのや}之を^{もの}憫^{いや}み、^{ひくれ}其病^{およ}める者を^{およ}醫せり。日暮るるに及
びて、^{もんとかれ}門徒^つ彼に^い就きて^{ここ}曰えり、^の此は^{ところ}野の^と處^{とき}にして、^す時^{おそ}已に^{たみ}晩し、^さ民^{かれら}を去らしめよ、^{およ}彼等が

しょそん ゆ おのれ ため しょく か ため しか かれら い そのゆ
 諸 村に往きて、己 の爲に 食 を市わん爲なり。然れどもイイス 彼等に謂えり、其 往く
 よう なんぢらこれ しょく あた かれらいわ われら ここ ただいつつ パン ふたつ うお
 を要せず、爾 等之に 食 を與えよ。彼等曰く、我等には此に唯 五 の餅と 二 の魚と
 あるのみ。かれい これ ここ われ たづさ きた すなわちたみ めい くさ うえ ざ
 五 の餅と 二 の魚とを取りて、天を仰ぎて 祝 福し、餅を擘きて、之を門徒に與え、門
 といつ パン ふたつ うお と てん あお しゆくふく パン き これ もんと あた もん
 徒民に與えたり。皆 食いて飽き、其 餘りたる屑を拾いて、十 二の筐に盈てたり。食い
 とたみ あた みなくら あ そのあま くづ ひろ じゅうに かご み くら
 し者は、おんな こども ほか およそごせんじん ただち そのもんと うなが ふね
 のぼ みづか たみ さ あいだ おのれ さき か きし ゆ
 登らしめ、自 ら民を去らしむる 間に、己 に先だちて、彼の岸に往かしめたり。

(比較用 口語訳)

イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人
 たちをおいやしになった。夕方になったので、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい
 所でもあり、もう時もおそくなりました。群衆を解散させ、めいめいで食物を買いに、村々へ行かせ
 てください」。するとイエスは言われた、「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物
 をやりなさい」。弟子たちは言った、「わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。
 イエスは言われた、「それをここに持ってきなさい」。そして群衆に命じて、草の上ですわらせ、五つ
 のパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟
 子たちはそれを群衆に与えた。みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のか
 ごにいっぱいになった。食べた者は、女と子供とを除いて、おおよそ五千人であった。それからすぐ、
 イエスは群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやり
 になった。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸 す。

※代式祈祷③ へ